



季節のもの



川崎ゆきお

「ついこの間まで、椿を見ていました」

「椿って、花のあの椿ですか」

「そうです。映画椿三十郎のあの椿です」

「懐かしいですねえ。椿三十郎。黒沢映画ですね」

「三十代なので、三十郎。適当でいいですなあ。本名があるはずなのですがね。それは分からない。まあ、架空の人物ですからなあ」

「はい」

「椿の次は梅です。これをよく見ていました」

「近所での散歩風景ですか」

「そうです。次が桜」

「はいはい」

「その季節が一番華やいでいましたなあ。さすがに花は桜に人は武士です。しかし、桜以外は花じゃない、武士以外は人じゃないと誤解されそうですね」

「ああ、そこまでは考えませんでした。それに、そんな言葉、初めて聞きました」

「何かの歌の文句でしょうなあ。そうして言葉になると、もっともらしくなる。そういうものかと思ってしまうものです」

「はい」

「次はかなり飛んでアジサイですか」

「梅雨まで飛びますか」

「これは人様の庭のを見ています。まあ、道端でも咲いていますが。私はこの花は今一つなんです。嵩高くてね。ボリュームがありすぎるんです。何となく白菜を連想します」

「でもよく見ておられますねえ」

「まあ、目に付くんでしょうねえ。咲いているとね」

「次は何でしょうか」

「蝉の抜け殻です」

「ああ、植物じゃなく」

「それを見ると、夏を感じますなあ。そして蝉時雨」

「蝉の抜け殻は小さいし、探さないと目にすることは無いと思いますが、蝉の鳴き声は目立ちます。目ではなく、耳に来ますねえ」

「まあ、そこまでですなあ。夏は暑くてあまり外に出なくなります」

「じゃ、蝉でいったん打ち止めですか」

「いやいや、こちらが知らないだけで、いろいろな草花が咲いているのでしょう。ただ

、椿や桜ほどではない。咲く花が多い季節は逆に目立ちません」

「蟬の前に蛙の鳴き声はどうでしょうか」

「最近聞こえませんかあ。蛙の鳴き声は。小川や田の蛙も雨蛙も。これらは季節からどんどん忘れ去られ、消えていくのでしょうかなあ」

「はい」

「でも雨が降る寸前、庭先で蛙が鳴くことがあります。いないはずなのにね。生き残った雨蛙がいるのかもしれない。しかし、姿を見たことがない。鳥じゃないと思いますよ。蟬かもしれないが、あれは確かに蛙だ。ただ、一匹なんです。合唱しない。そこがちょっと妙なんですなあ」

「昔は田植えの頃、蛙の鳴き声がうるさかったです。確かに最近聞きません」

「庭のその蛙は、蛙にしては、音がでかい。これはやはり蛙ではないのかもしれないなあ。しかし雨が降る直前に鳴く。不思議です」

「それで、季節感なんですが、蟬時雨の次は何でしょうか」

「白粉花を経て彼岸花でしょうかなあ」

「ああ、なるほど、あの朱色、目立ちます。いきなり咲いてますからねえ」

「まあ、そういうものは探し出して見るんじゃなく、自然と目に入るものがよろしい。そして、軽く見る。その程度です」

「秋は紅葉ですね」

「それは冬の手前ですなあ。まるで、季節の夕焼けです」

「はい、今日は季節感のお話し、ありがとうございました」

「いえいえ、偶然目にしたものを述べただけですよ」

「はい」

了